（様式１）

# 令和７年度　学力向上指導改善プラン

学校教育目標　「つながり　育む　幸せな学校」

目指す子どもの姿　「自ら考え、共に学び合う子どもの育成」

変容を目指す資質・能力　ａ知識及び技能　ｂ思考力、判断力、表現力等　ｃ学びにむかう力、人間性等　ｄ情報活用能力　ｅ課題解決能力　ｆ学び続ける姿勢　ｇコミュニケーション能力

三田市立武庫小学校
学校長　大向　勲
研究主体【　学力向上推進委員会　】

| 前年度 | | | 継続性 | 4月（※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を朱字で修正） | | | 2～3月 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学力向上に向けた重点的な目標 | 年度末評価（前年度の成果と次年度に向けた課題等） | 評価 | | 学力向上に向けた重点的な目標（変容を目指す資質・能力） | 成果となる目標（指標となる数値等） | 具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等） | 年度末評価 教員評価 | 年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等） | 評価 |
| ○九九や四則計算といった基礎的基本的な力を定着させる。<br>○言葉や図、式を使って自分の考えを説明できるようになる。 | ○授業での練習問題や、空き時間を活用した補充問題として、ミライシードのドリルパークに取り組んだ。くりかえし取り組むことができるので、タブレットを持ち帰った際の課題としても活用できた。計算ドリルとの併用で次年度も取り組んでいく。<br>○小中連携で本中学校校区における課題として、九九の習得が上がっている。今年度は、空き時間を活用し、4月から10月までの間、3年生対象に九九の練習を行った。次年度も、がんばり学びタイムを活用するなど、特に2，3年生において九九の完全定着を目指して取り組んでいく。<br>○どの教科においても「書いて一話して一聞き合う」というサイクルを大切にしたり、説明する時間を意図的確保し、自分の考えを伝える機会を増やしたりすることで、図や式を使って自分の考えを表そうとする児童が増えた。来年度は、学校全体でノートの取り方等、研究しているユニバーサルの視点を生かして、系統立てて学習の積み上げができるようにしていきたい。 | A | → | 基礎学力やVUCA時代を生きていくために必要な学力向上(a・b・d) | ①全国学調の各教科における平均正答率を前年度以上にする。 | ・学力向上に向けて、月曜日の5時間目（20分間）の活用方法を検討する。<br>・全国学力・学習状況調査の分析を教務担当や教科担当で行い、その後、校内研修会を開催する。 | 3.5 | ・算数・国語ともに、平均正答率は昨年度と比べて大きく向上しており、学力改善プランに基づく指導の成果が表れている。特に、基礎的・基本的な内容を問う問題において正答率の向上が見られ、日常の授業改善や継続的な取組が一定の効果を上げたと考えられる。一方で、前年度より改善は見られたものの、全国平均と比較すると依然として若干下回っている状況である。とりわけ、記述式の問題については苦手とする児童が多く、文章の内容を把握し、条件を正確に読み取った上で、自分の考えを表現する力に課題が見られる。そのため、応用的・思考力を要する設問への対応は十分とは言えない。また、学校評価アンケートにおいても、基礎・基本の定着について、約2割の児童が不安を抱いていることが明らかとなった。<br>・来年度は、朝の帯時間を昼の時間帯に移行し、その時間を活用して漢字や計算を中心とした基礎・基本の定着を図っていく。あわせて、月曜日の5時間目の運用方法を見直し、学校全体で系統性をもった指導が行えるよう、指導内容や方法について検討していく。 | B |
| ○各教科の理解を促すために、学習習慣を身につけさせる。 | ○授業での練習問題や、空き時間を活用した補充問題として、ミライシードのドリルパークに取り組んだ。くりかえし取り組むことができるので、タブレットを持ち帰った際の課題としても活用できた。計算ドリルとの併用で次年度も取り組んでいく。<br>○小中連携で本中学校校区における課題として、九九の習得が上がっている。今年度は、空き時間を活用し、4月から10月までの間、3年生対象に九九の練習を行った。次年度も、がんばり学びタイムを活用するなど、特に2，3年生において九九の完全定着を目指して取り組んでいく。 | A | → | 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の推進(a・b・c・e) | ①全国学調質問調査で「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」のあてはまる評価を30%以上にする。<br>②全国学調質問調査で「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の肯定評価を今年度より＋3ポイント以上にする。 | ・学習者自身が「なぜ？」と考えられるような問いを学習課題に設定する。<br>・学習の成果をプレゼンテーションやレポートにまとめたり、グループで発表したりする活動を取り入れる。<br>・授業の中でペアやグループ学習を積極的に取り入れ、協働する場面を意図的に設定する。<br>・「共に学び合う児童」の育成に向けての話し合い活動や、「感じる・わかる・できる」ためにUDをテーマにした研究を進める。 | 3.5 | 全国学力・学習状況調査の質問調査において、「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」とする「あてはまる」の回答割合は、目標としていた3割には届かなかった。一方で、肯定的な回答の割合は全国平均と同等の水準となっており、主体的に学習に向かおうとする意識は一定程度育成されていると考えられる。今後は、「あてはまる」と自信をもって回答できる児童を増やしていくことが課題である。今年度は、研究推進の柱として授業のUD化について研究を進めてきた。教職員が互いの授業を見合う機会を意図的に設定することで、UDの視点が学校全体に広がり、誰もが安心して学習に取り組める授業づくりが進んだ。その結果、学習の土台となる環境は整いつつあり、今後はこの基盤を生かして、児童が自分から進んで学習に取り組む主体性の育成につなげていく必要がある。来年度は、教科および特別活動に重点を絞り、児童が自ら考え、選択し、行動できる場や機会を意図的に設定することで、主体的に学習や活動に取り組む力の育成を図っていく。 | B |
| ○すべての教育活動の中に「からだづくり」を位置づけ、主体的に学習に取り組む姿勢を身につけさせる。<br>○のびのびと自分を表現できるクラスづくりを進める。<br><br>○自ら考え、認め合い、学び合い、高め合う子どもを目指して研究を進めていく。 | ○週に2日ずつ、朝の時間にキッピー体操や読書タイムに取り組むことで、始業時に落ち着いた気持ちで学習に取り組めるようになっている。<br>○「安心感」「達成感」「有用感」を教師の間で合言葉にしたことで、児童が安心して教現できる教室環境、雰囲気作りが進められてきた。今後も継続して取り組むことを大切にしたい。<br>○リズム縄跳びを週1回定着させることで、体感を観る一助となった。<br>○授業公開、実践交流会を経て、「感じる・わかる・できる」ための手立てについて考え、体育科における授業の流れや教師が抑えるべき要点を、職員間で共有できた。<br>○「共に学び合う児童」の育成に向けての話し合い活動や、「感じる・わかる・できる」ための手立てについては、次年度、ユニバーサルデザインをテーマにした研究を進める中で、引き続き検討していく。 | A | → | 読書活動の充実とともに、読解力や自分の考えを構築する力の向上(b・f) | ①児童アンケートの「家で本を読みますか」という設問において、肯定的な意見を50%以上に増加させる。<br>②保護者アンケートの「子どもは読書している」という設問において、肯定的な意見を50%以上にする。<br>③全国学調【国語】の思考力、判断力、表現力の読むことの問題の正答率（54%）を全国平均並（70%）にする。 | ・家庭読書、朝読書の取り組みの継続。<br>・朝読書の回数を週に2回設定し、本に触れる機会を増やす。<br>・業間休みやお昼の放送などを利用し、図書委員会や図書ボランティアの活動を充実させる。<br>・学校図書館司書と担任が連携し、常に身近に本がある状態を作る。<br>・電子図書を読書の中心ツールとして定着させていく。<br>・学習の中で自分の考えを持たせる手順や方法を教える。 | 3.8 | 月１回の家庭読書は今後も継続し、意欲付けを図る。<br>図書委員会の活動やボランティアさんの活動を活発に行ったこと、また、学校図書館司書の働きかけにより、図書室に足を運ぶ児童が多くみられた。 | B |
| ○読解力や自分の考えを構築する力を身につけさせるとともに、書字に対する苦手意識を軽減させる。<br>○時と場合に適した話し方を身につけさせる。<br>○読書習慣の定着を図る。 | ○週に2日朝読書に取り組んだり、学校図書館司書と連携して読書活動を推進したりしたことで、読書の習慣がついた児童が見られた。また、少しづつ内容の読み取りができるようになってきた。<br>○書く学習において、iPadを活用することで、自分の思いや考えを伝えることに対して楽に取り組めるようになった。<br>○自分の考えを、人の前で話すときの話し方に課題がみられる。聞き手を意識した話し方を身に着けさせるべきだ。<br>○月１回の家庭読書は今後も継続し、意欲付けを図る。<br>○図書委員会の活動やボランティアさんの活動を活発に行ったこと、また、学校図書館司書の働きかけにより、図書室に足を運ぶ児童が多くみられた。 | C | → | ・情報活用能力の向上(d) | ①全国学調質問紙のICT機器に関係する問いに対し、肯定的回答の割合を昨年度より3ポイント上昇する。<br>・自分のペースで理解しながら進めることができる。<br>・分からないことがあった時にすぐに調べることができる。<br>・楽しみながら学習をすすめることができる。<br>・画像や、音声等を活用することで学習内容が よく分かる。<br>・自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる。<br>・友達と考えを共有したり、比べたりしやすくなる。<br>・友達と協力しながら学習を進めることができる。 | ・グループワークやペアトークなどの活動の際ICTを活用することで、どの児童においても自分の考えを表出しやすいようにする。<br>・ノートやホワイトボードに加えて、キーノート等それに代わるアプリを用いて自分の考えを交流させる機会を意図的に授業に取り入れる。<br>・情報モラルや著作権に関する授業を、各学年に応じた内容やタイミングで行うことで、情報リテラシーを定着させていく。<br>・家庭でのタブレット使用の頻度をこれまで以上に増やしていく。 | 3.6 | キーノートやオクリンクプラス等のICTツールを授業に積極的に取り入れたことで、児童の表現の幅を広げることができた。また、自分の考えを共有し、互いの考えを見合ったり、意見を交流したりする活動を継続的に行ったことで、意見交換が活発になり、多様な考えに触れながら学びを深めることができた。一方で、情報モラルや情報機器の正しい使い方、マナーに関する指導については、継続的・体系的な取組が十分とは言えない点が課題として挙げられる。また、家庭でのICT機器の活用についても、学校での学びと十分に結び付いていない現状がある。来年度は、ひょうごGIGAワークブックを計画的に活用し、発達段階に応じた情報モラル・マナーの指導を行うとともに、家庭と連携しながら、ICTを適切に活用する力の定着を図っていきたい。 | B |
| ○ICT機器を効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る。 | ○体育において、自分たちが運動している姿を動画に撮り、それを見ながら次の作戦を考えたり、矯正的フィードバックを受け入れたりすることができた。<br>○音楽ではオクリンクを活用して演奏動画の配信や、楽譜の配布などを行った。<br>○特別活動においては動画の作成やプレゼン発表など効果的に使用できた。<br>○子どもたちが使う頻度が高くなってきているので、今後も情報モラルや著作権に関する授業を適切なタイミングで行うことで、情報リテラシーを身につけさせていきたい。 | A | → | 児童一人ひとりの自尊感情の向上(c・g) | ①学校評価の児童アンケートにおいて、「自分にいい所があるか」という設問において、否定的な回答を20%以下にする。 | ・自尊感情を築く「達成感」「有用感」「安心感」を教師が常に意識し、授業のUD化を行うことで、みんなが、感じる、わかる、できる授業づくりを行う。<br>・学期ごとに人権基本方針をもとに話し合いを行い、自分自身の人権意識や感覚を見直し、学級づくりに生かす。<br>・児童会のたて割り活動（むこっ子活動）等、充実した特別活動を通して達成感や有用感を味わわせ、自尊感情を高める。<br>・だれもが安心感や有用感、達成感を持てる授業づくりを行う。 | 4 | ・児童アンケートにおいて、「自分にいい所があるか」という設問に対する否定的な回答は、今年度も20%を超えており、自己肯定感の育成については、依然として学校全体の課題である。一方で、UDの視点を取り入れた授業づくりを進めたことで、安心して発言したり活動に参加したりできる場面が増え、自分の存在を肯定的に捉えようとする姿が一部の児童に見られるようになった。このことから、学習環境の改善については一定の成果があったと考えられる。今後は、児童会のたて割り活動（むこっ子活動）等の価値をより高め、その意義を児童に分かりやすく伝えるとともに、必要な活動時間の確保を行っていく。充実した特別活動を通して、達成感や有用感を味わわせることで、児童の自尊感情の向上を図っていく。 | A |
| ○自尊感情を高める取り組みとネットモラルを含めた情報リテラシーの向上を図る取り組みを促進する。<br>○児童の自尊感情、自己有用感を高める。 | ○「ネットモラルについて」の外部講師やSCによる「心の教室」を行い自分の生活を振り返り、今後どうしていくべきかを考えられた。<br>○職員室や印刷室に、合言葉として「安心感」「達成感」「有用感」を掲示したことで、職員間で意識することができた。<br>○児童アンケートの「自分にいいところがあると思う」の項において、肯定的な回答をした児童は78.6%で、否定的な回答が21.4%であった。次年度、児童会のたて割り活動（むこっ子活動）等、充実した特別活動を通して達成感や有用感を味わわせ、自尊感情を高めさせたい。 | C | → | 家庭における学習習慣の確立（a・c） | ①学校評価における、保護者アンケートで、「子どもは毎日宿題をしている」」の項目で80%以上が肯定評価となるようにする。<br>②全国学調質問調査で「学校の授業時間以外の学習時間」が１日当たり1時間以上という回答を全国平均以上にする。 | ・武庫小学校の自主学習の手引きを年度初めに児童と保護者に説明し、定期的に自主勉強の推進を啓発・発信していく。<br>・学校評価の保護者アンケートに「家庭で計画的に学習を進めている」という項目を設け、実態を把握する。 | 2.8 | 職員の評価（9割）と児童・保護者の評価（8割弱）には大きな差が見られる。このことから、学校では比較的前向きに学習に取り組む姿が見られる一方で、家庭では自主的に学習する習慣が十分に定着していないことが分かる。特に、自主学習に取り組めているかどうかが、家庭での学習習慣に大きく影響していると考えられる。現状では、年度初めに一度配布している家庭学習の手引きがそのままになり、家庭での学習を振り返る機会が十分に設けられていない。今後は、手紙やアンケートなどを活用し、家庭学習を振り返る場を設定したり、自主勉強の進め方の見直しをしたり、児童・保護者双方の意識を高め、家庭学習の習慣化につなげる必要がある。 | C |
| ○自分が、地域の人たちに支えられていることを実感できるようにする。<br>○家庭における学習習慣を確立する。 | ○家庭学習については、取り組みについて各家庭での温度差がみられる。定着が見られない児童の家庭に向けて、継続的に声を掛けていく。また、学校だよりや学年だより、学級懇談会での話題にも取り上げていく。<br>○むこっこ広場など、放課後地域のボランティアさんが週一回学習を支援してくださっている。のびクラスでも声を掛けている。<br>○全校行事として、ボランティアへの感謝の会を開いたことで、自分たちを学習面や環境面で地域の方々が支えてくれていることについて考えさせることができた。 | A | → | 小・中連携の推進（a・c・f） | ①学力向上に向けた小中連絡会を開催する。 | ・学力向上に向けて、児童生徒に身につけさせたい資質について、中学校区での共有を図る。<br>・小・中共に、「複数の情報を関連付ける学習の充実」と「自己の考えを論理的に表現する学習」について、授業改善を進めていく。 | 3.1 | 今年度は、中学校区で研修会を開催し、小中学校の学力実態について情報共有を行った。学力テストの分析を小中学校間で実施することで、それぞれの学校の特徴や課題を把握することができ、教職員間で学力向上に向けた意識共有が進み、連携の基盤が整いつつあることが確認された。一方で、カリキュラムや指導方法の具体的な調整は十分には進んでおらず、今後は小中学校間での研究や授業改善の連携をさらに深め、実践に結び付ける必要がある。来年度は、教科のカリキュラムを中学校と見直し、学習内容や指導方法の連続性を高めるとともに、特別活動（特活）の研究にも中学校の先生を招き、学校間での学習・活動改善の情報共有を促進することで、児童・生徒の学力向上につなげていく。 | B |
| ○小・中の連携を行い、スムーズな校種間の接続を図る。 | ○中学校からの出前授業で国語や社会の授業を体験し、中学校の授業に向けての安心感を持たせることができた。<br>○学校園所連携連絡会を開催したことで、各学校園所の様子や課題について共通認識することができた。 | A | → | | | | | | |
| ○児童の成長や課題、目指す児童像についての共通理解と個に応じた支援の充実を図る。 | ○年3回の学団研修会、阪神地区にも公開発表した全体研修会、各学年での1人1公開授業、全職員の実践記録の交流会など、充実した研修会を重ねることができた。 | A | | | | | | | |